

データでみる軽トラ市

(その24)

愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長 戸田敏行
地域政策学部教授

復興支援と軽トラ市

9月号に軽トラ市に関する最近の出来事として、輪島市朝市組合に石川県軽自動車協会から2台の軽トラが寄贈されたことを記した。今月はその続報である。

○能登半島地震と輪島朝市

能登半島地震が発生したのは、本年の1月1日16時10分である。元旦気分の中に起こった非常事態として、強く記憶しておられると思う。一般的に災害対策は、災害直後の緊急事態対応、3～6か月までの応急対策、それ以降の復旧・復興対策に分けられる。対象も当初の生命維持から地域社会維持に広がりを持つてくる。

この区分に従えば、能登の場合も3月～6月を起点として、地域社会維持の取り組みが本格化してくることになる。そうした地域社会維持の重点事項として、輪島朝市の復興があるだろう。輪島朝市は、日本3大朝市と呼ばれ、奈良時代後期・平安時代からの歴史を持つ能登のシンボルである。だが、朝市が行われる朝市通りは、地震による建物の倒壊と火災によって非常に強いダメージを受けている。

輪島朝市は復旧できるのか。その困難な状況の中から3月23日には出張輪島朝市 in 金



写真1 出張輪島朝市in金石（金沢市）

石が金沢市で開催される（写真1）。現地開催が困難なときに、出張に転じた迅速な手法開発でもある。先に記した復旧・復興対策の時期として、3月末は最速である。この出張朝市は、現時点（9月10日現在）で39回開催されており、その内訳は石川県内26回、北陸隣接の富山・福井県が3回、その他の県が10回である。ほぼ毎週末に実施されており、力強さを感じる。

だが、それでも輪島現地での復旧は重要である。朝市通りの建物の回復には数年の時間を要するだろう。それでは関係する方々の生活継続が困難になる。こうした現象は、これまでの震災でも体験したことである。出張朝市は輪島市内のスーパーでも7月から行われるようになるが、朝市が景色として見える形



写真2 寄贈された軽トラックの活用

で現地再開することは観光にもつながり、何よりも復興のシンボルとして重要であろう。そこに、軽トラ市という方法が意味を持つことになる。

○朝市復興と軽トラ市

朝市復興に軽トラ市が役立てるのではないかという漠然とした考えが地震後に語られるようになり、徐々に具体化しつつある。

まず、軽トラ市団体であるが、震災直後の2月には新城軽トラ市に能登復興支援の販売ブースが設けられ、能登半島各地の産品が代行販売される。全国の軽トラ市でも災害の経験例があり、被災は直接関係ある出来事として受け取られる傾向にある。この取り組みは、雫石軽トラ市、川南軽トラ市等にも広がっており、持続的な取り組みとなっている。一方、軽自動車業界では、3月の第1回出張朝市in金石に軽トラ市担当者が訪問し、朝市組合との連携が始まる。ここで把握された当面の必要が出張朝市を行う際の軽トラックであり、7月の石川県軽自動車協会からの軽トラ寄贈に発展する(写真2)。さらに、軽トラ市が朝市の復興に有効であるとの共通認識



写真3 名産品の展示と軽トラ市の紹介

も形成される。

こうしたことから輪島地域への訪問の機会も出てくる。7月には筆者らが輪島高校を訪問した際に、被災後の文化祭に軽トラ市から出店できないかという呼びかけを、平野校長先生から受けることになる。一方、復興事業として朝市組合が主催者となる朝市カムバックイベントが文化祭とほぼ同日に計画されており、これらにモデル軽トラ市を出店しようという展開になった。

○モデル軽トラ市の取り組み

モデル軽トラ市の実施主体は、全国軽トラ市でまちづくり団体連絡協議会(軽団連)と軽トラ市の実験を行ってきた愛知大学、協力が日本自動車工業会と石川県軽自動車協会である。

提供する商品は、軽団連からの呼びかけで、岩手県雫石・愛知県新城・宮崎県川南の3大軽トラ市、長野県篠ノ井、静岡県磐田・掛川・浜松、岐阜県下呂の合計8軽トラ市からである。提供商品は約30品目500点となった。

各地域の名産品であり、それだけでも魅力



写真4 輪島高校での開催

的である。これらを新城軽トラ市が取り纏め、搬送する形式である。軽トラックは3台で、輪島朝市のシンボルカラーであるオレンジのテントで統一して、軽トラ市のイメージを作る(写真3)。特にカムバックイベントでは、寄贈された軽トラ2台もオレンジのテントで連動するものと計画された。これが8月31日、9月1日に予定したプログラムの一部である。しかし、残念ながら台風のためにこれらは延期となり、9月4日の午前中に輪島高校文化祭、午後に仮設住宅近くの駐車場2か所での縮小開催となった。

写真4は、輪島高校での開催風景である。住民の来場もあるが、高校生や先生方の関心が高かった。現在の高校教育では探求学習として地域を学ぶ例が多いが、そうした題材として軽トラ市に興味深いということである。長期にわたる復興の担い手は若者であり、復興と教育が連動する可能性を感じた。写真5は仮設住宅近くのスーパー駐車場での出店である。高校では参加費100円(参加費は高校に寄付)で名産品1点を提供したが、仮設住宅では無償配布である。来られた方は概ね高



写真5 仮設住宅近くのスーパー駐車場で開催

齢であり、名産品に興味を持って頂いた。協働した朝市組合の方からは、漁業での軽トラ利用状況、先行している復興事業や出張朝市と軽トラ市の連携などの視点も提供された。

軽トラ市に何ができるだろうか

今回は、輪島朝市の復興に関して軽トラ市からのアプローチを紹介した。一緒に就いたばかりであり、まずは関連する方々の連携のもとに、モデルが実施出来たということであろう。教育との連携や復興事業との関係などが確認できたことは有効であった。モデル軽トラ市には、新城軽トラ市から参画があったが、軽トラ市運営者と朝市関係者等との交流を持つことが重要との意見もあった。軽トラ市は人の繋がりによる事業である。今回知り合うことのできた被災地の方々との交流を継続し、そこから軽トラ市に何ができるだろうかを問い続けることが必要なことであろう。本稿の校正中に、輪島が豪雨に襲われた。漸く復興という時の再被災である。小さくとも出来ることを考えていきたい。